

## 長塚圭史さん WS 参加俳優さんのご感想

2018年12月14日～17日、国文学研究資料館オリエンテーションルームにて、長塚圭史さんとWSを行いました(詳細は「古典インタプリタ日誌」をご参照ください)。  
参加したのは、様々な経歴をもつ俳優さん6名と、国文研の研究者たち。  
初めて国文研へ来館した俳優さんたちは、このWSでどのようなことを感じたのでしょうか。WS終了後にお送りくださった感想を公開します！

参加俳優(敬称略、五十音順)：坂本慶介／菅原永二／高木稟／引間文佳／藤間爽子／八十田勇一

### ■□ 菅原永二 □■

今回で3回目の参加、立川に行くのも慣れてきた。

国文学研究資料館内の図書館の見学へ。マイクロフィルムに保存された資料など、貴重なものを見せていただく。図書館は一般の方々にも開放していて、調べものをしたり、本を読んでいたりとゆっくりした時間が流れていました。みなさん真剣な表情で、どの人も研究者に見えるから不思議でした。

WSはというと前回からテキストとして使っている「江戸 生 艶気樺焼」を、長塚くんが現代の要素も少し取り入れつつ台本にしてくれたものを配役してやってみる。紆余曲折あったが、艶じろうと浮名は一緒になれたし、改心して親元へ帰ったしハッピーエンドじゃないか。

また、前回のWSで「心学早染艸」に出てくるキャラクター善玉、悪玉を登場させるエチュードを四つ作ったが、今回は実際に声に出して「心学早染艸」を読み、少し動いて演劇にしてみるということをやった。

この黄表紙を演劇にすることの難しさがすぐにわかった。映像やアニメーションならば想像がつくが、生身の人間と善玉悪玉という心の部分が同時に存在するこの話は、中々演劇で(しかも少人数で)効果的に表現することが難しい印象。ディスカッションというか話し合いが行われた。

最終日はアニメーション作家の山村浩司さんの作品を見せていただいたり、東京の名所が描かれた巻物を見せていただく。

山村さんも影響を受けたという蕙斎の絵がどれも可愛らしくて印象的でした。なぜか手

塚治虫が頭に浮かんだ。

黄表紙に触れるのも3度目ということもあり、絵を見ながら、この台詞は誰が言っているかなど、少しずつ黄表紙の読み方にも慣れてきた。

現代の漫画の原型というか、かなり通ずるものがあるなあと、気負わずリラックスして読めました。

## ■□ 高木稟 □■

最近、浮世絵を刷る映像を見まして、  
当時、黄表紙もこんな感じで刷ってたのかなあと思っております。

刷り台は前傾していて、  
色をのせて、和紙をハラリと置く…想像より遥かに  
見定めよく、潔く。

そして、とてもとてもやさしく  
刷る。

昨年、最初のワークショップ時に入口先生から  
「あんなに強く擦らないですね」  
というお言葉をいただいて、ずっと気になっていたこと。  
いや、動画調べたらすぐに見られるんですけど…それをおもいつかず…  
いつも頭のどこかで気になっていたのです。

次はきつともっとちゃんとやれる。はず。

先生方から  
黄表紙について、  
江戸時代の庶民について、たくさん聞かせていただいて、少しずつ江戸時代が遠くなく、  
親しい感覚になり、  
演じるというときに、  
以前ほど気張らずに、わりとすんなりやれるようになってきました。  
自然と江戸時代が気になるようになり、  
図書館に行っても、今まで立ち入らなかつたエリアに行くようになりました。  
気になった黄表紙を解説付きですが、読んでみたり。  
一年前の自分からは想像できないです。

黄表紙を劇にするための準備が整ってきている。

と、思っていました。

しかし、

前回のワークショップで

急激に難しくなったと感じております。

言葉や衣装、どこまで説明するのか等々。

今までのワークショップがあったからこそ、

辿り着けた悩みかもしれません。

これからどうなっていくのか。

若干の不安と希望を抱えてる状態。

この流れ自体、何か物語を読んでもるような、

そんな気にもなっています。

## ■□ 八十田勇一 □■

黄表紙をテーマにして入口先生、有澤先生に江戸文化、江戸庶民の生活を丁寧に教えていただき、また実際の黄表紙に触れさせていただき、紙の軽さや彫り・刷りの技術、製本の技術にももの凄く驚かされました。演技者としては戯作者・山東京伝の世界を再現するだけでなく、製本に関わった人たち、貸本屋さん、新作を心待ちにしていた読者たち、そして紙文化を愛する現代の日本人、どれも演じてみたいです。